

劇団きづがわ第71回公演

第43回大阪新劇フェスティバル参加

河

原爆詩人・峠三吉さん

その仲間たちの姿を通して

《戦後七〇年》の今を問う感動のドラマ！



作／土屋 清

演出／林田時夫

とき：12月19日(土) AM11:00 & PM4:00
20日(日) PM 2:00

ところ：リバティおおさか ホール (大阪人権博物館)
(JR環状線 / 芦原橋下車南へ約 600m)

入場料： 前売り一般 3,000円

学障ニ7 (65才以上) 2,500円

ペア (夫婦) 5,000円

(当日券はいずれも 1人 500円UP)

劇団きづがわ第71回公演

河

4幕



峠三吉

原爆投下の広島…。廃墟のなから芽吹く自由と文化の息吹。その広島で、峠三吉は青年文化連盟のリーダーとして、詩作に励み、社会科学研究会、文芸誌の発行、詩画展や音楽会と、病身を引かず大車輪の活動を続ける。だが、その内面では、とかく心情に流れやすい自己の詩に行き詰まりを感じ、その突破口を求めている。

そんななか、アメリカ占領下での「民主主義」の時代も終わりを告げるように、企業整備行政整備の合理化の嵐が吹く。ここ広島では、日本製鋼広島工場で660人の首切りと共に、武装警官が労働者や市民に襲いかかってきた。

峠は、この光景を目の当たりに『怒りのうた』を書きあげ朗読、深い感銘を与える。そして、職場の文学サークルの仲間たちと共に『われらの詩の会』をスタートさせた。

しかし時代は、民間大企業、マスコミ、公務員、公共企業体へと首切りの嵐は荒れ狂い、下山、三鷹、松川事件と、『日本の黒い霧』が列島を包み、レッドパージ、朝鮮戦争勃発へと激動する。

この時、彼らは5年間の沈黙を破って、原爆を語り始める。占領政治の下、抑えに抑えてきたものが堰を切つてあふれ出す。平和と名のつくすすべての集会が禁止されたヒロシマから、『風のように炎のように』原爆詩人・峠三吉たちの反核・平和の烽火が…。



スタッフ

作 土屋 清
演出 林田時夫
舞台監督 北尾利晴
同 助手 小森健司
美術 和田雅子
大道具 三村省三
照明 新田三郎
音響効果 照島佳宏
小道具 河原正隆
映像 溝口隆徳
同 映像 中山講一
制作 和田雅子
制作 オペ 椎名千浪
池田広美

キャスト

峠 三吉 中屋 光雄
妻 春子 和田 雅子
市河 睦子 林田 彩
見田 要 寺島 由浩
大木 英作 信田 政博
鈴木 凱太 山本 惣一郎
妻 せき 山村 八子
増田 正一 山田 一己
吉本 久子 西尾 純子
岩井美代子 橋野 悦子
オルグ 島本 拓治
青年たち 福露 光司
平山 憲子



リバティおおさか略図



リバティおおさか (大阪人権博物館)
〒556-0026 大阪市浪速区浪速西 3-6-36
TEL:06(6561)5891

河

4幕

- 第1幕 『絵の具』
 - 第2幕 『怒りのうた』
 - 第3幕 ① 『八月六日』
② 『一九五〇年の八月六日』
 - 第4幕 ③ 『ひろしまの空』
『その日はいつか』
- (各幕のタイトルは詩の題名)



原爆投下の広島、戦後の激動期。『風のように、炎のように』生きた峠三吉と仲間たちの群像！